

コミュニティ・スタディで書かなかったこと

坪内良博*

クランタン州の農村でいわゆるコミュニティ・スタディに従事してから三十三年が過ぎた。十九世紀末の開拓村が、天水田稲作と小規模ゴム園とを主な収入源とするようになっていた時期に調査に入って、タバコ耕作ブーム、出稼ぎの増加、町との連携による生活体制へと変化していく過程を、再調査を重ねて記述してみた。このような状況に屋敷地と家族の動態を重ね合わせてみた。目に見えるというか、量化して把握することを目指した調査であった。集落内で世帯単位に生じた当たり前の事実をできるだけ克明に記述した。このことが歴史的な証言として今後何らかの役を果たすか、あるいは、とるに足らぬ当たり前の過去として忘れ去られるかは、私自身のかかわることではない。ここで紙面を与えられた機会に書いてみたいのは、このようなコミュニティ・スタディのときに、いくら意識していたが、報告では正面から取り上げなかった若干の側面についてである。

書かなかったことの一つは宗教ないし政治的な対立の具体例である。マレーシアの現政権に対立するイスラーム政党がクランタンで勢力をもっていることは周知のとおりである。断食月における断食の励行、女性におけるトドンの着用、レストランでのアルコール類の供与の制限などイスラームに基づく行動基準の実践は、今日、クランタンの特色の一つになっている。調査をはじめた一九七〇年あるいはそれ以前には様子が少し異なっていた。女性は必要があれば髪を覆うためにスカーフ状の布を身に付けていたが、髪の毛を人前にさらすことには殆ど抵抗がなかった。コタバルのホテルの屋上では耳を聳するような音楽とともにビールが供せられ、近くの村のマレー人女性がホステスとして侍っていた。陽気な活動的な女性の姿を保ちつつも、クランタン全体がイスラーム色に覆われるようになったのはその後のことである。「情熱の愛の浜」と呼ばれていたコタバル近辺の海岸も多分その淫乱さを嫌って、いつのまにか「明月の浜」と名を変えている。

村の中では、マレーシア政府与党支持派とイスラーム政党支持派とが選挙の度に対立をあらわにした。稲作のための肥料購入の補助金、道路と家屋をつなぐ小道の簡易舗装、プングル選出など、選挙がらみで提供される利権の分配をめぐる、多くの不公正が発生し不満がささやかれた。調査集落は道路沿いに一キロメートル半にわたって展開する家屋群から構成されているが、両端部では草分けの出自を異にしている。成立の過程からみて、もともと一体性がなかったという事情もあるが、集落の両端に立てられたモスクを拠点として分離の様相がさらに強まったようにも見える。

書かなかったことの他の一つは華人との接触の諸相である。クランタンはマレー人の割合が多いことで知られるが、町を中心に華人が活動している点は他州と同様である。農村部に住む華人もないわけ

* 甲南女子大学文学部教授、京都大学名誉教授

ではない。調査集落から一キロメートルばかり離れて、調査集落とほぼ同じ時期に開かれた福建系華人の集落がある。互いに干渉することなく存続してきたが、タバコ栽培にともなってトラクター賃耕の導入やタバコ乾燥工場の設立などが行われると、華人集落居住者の経済的な仲介役割が目立つようになった。

クランタンでは華人とマレー人の結婚は、少ないとはいえ無いわけではない。大抵の場合華人男性がマレー人女性を娶っており、イスラームへの改宗を伴っている。華人の幼女をマレー人として育てることは結構多い。調査集落の中にもマレー人の男性と結婚した華人の女性が住んでいる。この場合は、コタバルで働いていた集落出身の男性と商いに訪れた華人女性との恋が、華人女性の改宗を伴ってこの結果をもたらした。

国境を越えた人の動きについても、正面から取り上げることをしなかった。調査集落住民だけに焦点を当てても、少し古い時期には、タイ領を経由して鉄道でケダーに赴いた稲の収穫のための出稼ぎやタイ領内のゴム園での労働が日常的に行われていた。やがてマレーシアの経済状況がよくなると、今度はタイ国籍のマレー人が、集落内に小屋のような家屋を建てさせてもらって住む姿も見られた。タイ領からの越境入国者(もちろん密入国だが)を運ぶ自動車を運転して生計の一部とする住民もあった。シンガポールの建築ブームがこの集落からも多くの出稼ぎ者を送り出す時代がこれに続く。

個人の行動を詳細に記述しなかった理由の一つとして、同時代の住民のプライバシーに関する配慮が働いていたことは否めない。数えるという手法、あるいは量化主義をめざしていたために、個別的な事件の叙述を行わなかったという経緯もある。コミュニティ・スタディを標榜して、集落内に焦点を当てて、全世帯調査によるトレンドの索出を目標にしたことが、コミュニティ外部との関係や、コミュニティ外部における集落成員あるいは集落出身者の活動現場にまで記述を広げなかったことが他の理由であった。外部との関係や外部からの影響を気にしていたが、住民自身の冒険的精神を前提とするというよりはとく受身の立場であった。

世界システムに振り回されるタイプの叙述は私自身好まない。コミュニティ・スタディが視野をコミュニティに限定してしまうのも気に入らない。コミュニティ・スタディから手がけて、成員が歴史の一齣にコミュニティを超えた場を含めて参与し、地域がその独自の体制をそれなりに更新しながら存続する姿を、実証的かつ物語的に描き出すという作業は、困難ではあるが挑戦に値するという思いが念頭を去らない。